

## クラス通信による「教師が目指す教室」実現への試み 学習者間の関係性構築をめざして

### An Attempt to Realize an "Ideal Classroom" by Use of Class Newsletters Aiming for Good Learner-Learner Relationships

武田 恵司(イーストウエスト日本語学校)  
Takeda Keiji (East West Japanese Language School)

#### 要旨

民間の日本語学校の授業クラスにおいて、2004年7月から現在まで「クラス通信」という活動を筆者は続けている。2005年7月から9月までの学期の授業では、教師の側がクラス通信を使って、学習者間で「他の学生の話聴く」ということの大切さを教示しながら、関係性を構築することに注視した。しばらくすると学生から、他の学生の話聴くことへの肯定的な意見などが散見されるようになった。クラス通信は教師が目指す教室を実現するためのツールとなりうる可能性を持っている。

The present author has been publishing the class newsletters in a private Japanese language school since July 2004. During the semester from July 2005 to September in the same year, the author emphasized the importance of listening to other students so that they could develop better relationships among them through the class newsletters. After a while positive responses on the importance of listening to other students were observed. The class newsletter has the potential to realize a classroom that a teacher aims for.

【キーワード】クラス通信, 教師が目指す教室, 学習者と教師の関係性, 学習者間の関係性

Keywords: class newsletter, classroom that a teacher aims for, student-teacher relationships, relationships between students

#### 1. はじめに

筆者の教育現場は民間の日本語学校であるが、2004年7月から現在まで、自分が教える授業クラスにおいて「クラス通信」というものを発行している。当初は学習者と教師との関係性を構築するために行っていたが、続けるうちに、学習者と教師との関係性よりも、まずは学習者間の関係性を構築することの方がより大切なのではという思いに至った。

そこで、2005年7月から9月までの学期の授業では、教師の側がクラス通信を使って、学習者間で「他の学生の話聴く」ということの大切さを教示しながら、関係性を構築することに注視した。しばらくすると学生から、他の学生の話聴くことへの肯定的な意見などが散見されるようになったが、それはクラス通信による教示ではなく、クラス授業での教示から得られた教訓であった。

## 2. 実践の目的

### 2.1 クラス通信と関係性構築

Deci & Ryan (1985) は、自己決定理論における動機づけとして「無力状態」から「外的調整」「取り入れ」「同一化」「統合」を経て、「内発的動機づけ」に至ると述べている。そしてその発達を促進する要因として、その一つに「関係性」というものを挙げている。

学習者と教師がよりよい関係を結ぶことで、授業への意欲も湧き、学習者の日本語学習もよりよい方向に進むと筆者は考えている。そしてその一助として、クラス通信の発行を位置付けた。ちなみに、本発表で述べる関係性については「クラス授業において、よりよい学びに寄与するお互いの関係」と定義しておく。

### 2.2 クラス通信 その発行形態の変遷

2004年7月の発行開始から2005年3月までの9か月間に発行してきたクラス通信は、日々の雑感をA4用紙1~2枚程度で教師が書いて学生に配布していただけであった。しかし、これでは教師から学習者への一方的なものにとどまってしまう、学生とのコミュニケーションが取れている実感が湧いてこなかったことも事実であった。

そこで、2005年4月から新しく受け持ったクラス(中級クラス)では、藤田(2001)や藤田・溝上(2001)などの「授業通信」を参考に、クラス通信の発行形態の変更を行った。具体的には、授業終了時に3~5分程度で学生に毎回コメント(A5用紙の便箋スタイルのもの)を簡単に書いてもらい、そのコメントについて次回のクラス通信上で回答するという発行形態にした。学生からのコメントは、可能な限りできるだけすべて取り上げているが、それによって、以前よりもクラス通信の分量は増え、B4用紙で3~4枚、多い時で5枚程度(表裏で印刷するので、実際には2~3枚)になった。

クラス通信は日本語学校の一日の授業(4コマ)の中で、だいたい1時間目の終わりか、最低でも2時間目の終わりには配るようにしている。実際にどのぐらいの学生が読んでいるかについて調べたことはないが、休み時間に配るとすぐに読み始める学習者を見ることはある。ただし、もらっても読んでいない学習者もいると思う。

学生が書いてくるコメントの内容は「その日の授業についての感想」が一番多い。その他には「学生の日々の雑感」や「日本語についての質問」などもあるが、「教師個人に対する質問」や「飲み会の誘い(男性に多い)」なども時々ある。

### 2.3 発行形態を変更したことから生まれた新たな疑問・問題意識

上記2.2のような形でクラス通信を発行しているうちに、一つの疑問が湧いてきた。その疑問とは「関係性を『学習者と教師』という枠組だけにとどめておいてもいいのだろうか」「学習者と教師の関係性よりも、むしろ学習者間の関係性の方がより重要なのではないか」というものである。

当然のことながら、クラスには「学習者と教師」という関係性の他に「学習者と学習者」という関係性も存在する。実際、学習者間の関係性が学習に与える影響は否定できない。しかも語学教育という場においては、ディスカッションやロールプレイなどをはじめとして、学習者どうしのやり取りの中で、互いの能力を磨き合うことも少なくない。そのため学習者間の関係が悪ければ、そうした活動も意味をなさなくなってしまう可能性がある。

そこで、そうした状況を未然に防ぐために、2005年7月から新たに担任をすることになったクラス(上級クラス)では、クラス通信の発行形態はそのままにして、そうした学習者間の関係性を構築するような何らかの工夫がクラス通信上でできないだろうかと考えた。

### 3. 実践の結果と評価

#### 3.1 クラス通信を使った学習者間の関係性構築の試み

2005年7月から9月に担当したクラスの人数構成(国・地域)は、韓国9名、中国1名、タイ1名、ミャンマー1名の、計12名であった。なお、この中には、以前自分が初級クラスや中級クラスで教えたことのある学生が5名いた。

教師は学生間のコミュニケーションが活発になることを意図してクラス通信を発行し続けた。以下に具体的な例を挙げる(斜体の部分が学生のコメント)。

*このクラスの授業がおもしろいです。3か月はみんな日本語レベルがちがいだから私がいままちがえた時恥しかったことも多かったです。でもこのクラスは先生もやさしいしまちがえてもあまりはずかしくありません。^^これから自信をもっていっしょうけんめいします。*

どんどんまちがえましょう。  
それでも、まわりのクラスメートの言っていることが(まちがえていたりして)よくわからなかったら、クラスの約束のところで書いたように、「すみません、それってどういうことですか」「今言ったこと、もう少し詳しく教えてください」とか、どんどん質問をしてください。そうすることで、コミュニケーションが成立するはずですし、みなさんの日本語の力も、どんどん上がっていくはずですよ。  
教室は「まちがえてもいい場所」だと、私は思っています。みなさんといっしょに、どんどんまちがえましょう。

学生からのコメントを受け、上記のようなことを教師が書くことで「学生間のコミュニケーションの活性化」「お互いの話を聴き合う場」ができることを狙った。そしてもちろん、クラス通信上だけではなく普段の授業においても、間違いなどを気にせずどんどん意見を言ってもらえる雰囲気作り、お互いの話を聞き合うことのできる雰囲気作りを心がけた。

#### 3.2 実践の評価 その1 クラス通信を使った試みの結果

そうしているうちに、学生からのコメントに「クラスメートの話に耳を傾けるようになります」といった言葉が見られるようになった。以下に、死刑制度について授業でディスカッションをした時の学生からのコメントを一例として挙げておく。

*今日死刑についていろいろ話してよかったです。。。 ...【中略】...  
そしてこれからメートの話にも耳を傾けることについて気をつけます。^^*

散見されるクラス通信や授業での教示の効果により、学生たちがお互いの話を聴き合い、

その上で自分の意見を話すという姿勢を作ることができた。それはこの後の授業においてもそれほど変わることはなかった。学習者間の関係性も、教師の目には良好に見えた。

### 3.3 実践の評価 その2 クラス通信は「聴く姿勢」を作ることにとれほど寄与したのか？

しかし、学生が書いてきたコメントを見直してみると、学生がコメントで書いた意見はクラス通信で教師が書いたことを踏まえたものではなく、授業中の教師の教示を受けたコメントであることが多かった。もちろん、当初からクラス通信上だけではなく、授業でも教示を行なうつもりではあったが、クラス通信が全く学習者の意識の変化に寄与していないようにも見えた。

この結果を生んだ可能性は、主に三つほど考えられると思う。

一つ目として、学生がそもそもクラス通信からの教示を受け取っていない可能性が考えられる。筆者がクラス通信を学生に配ると、休み時間などにそれなりに興味を持って読んでいる光景をよく見かけるが、実際に学習者はそうした教示をクラス通信から受け取っていないのかもしれない。

二つ目に考えられる可能性としては、こうした教示は授業で直接示した方が、インパクトがあるのかもしれないということだ。紙の媒体となっているクラス通信よりも、学生が授業中に教師から聞いたことの方がより心に残り、それを受けて学習者がコメントを書く、という流れになっていたことも考えられる。

もう一つ、三つ目として、クラス通信を読んだ感想という視点でコメントを求めていなかったために、コメントにそうした言葉が上がってこなかった可能性も考えられる。これについては、コメントで授業の感想だけではなくクラス通信の感想も求めてみることで「学習者の側から見た、クラス通信の新たな視点」を得ることができるかもしれない。

## 4. 考察

### 4.1 学習者の意識の変化にクラス通信がどのように機能したのか

以上のように、本実践では結果としてクラス通信が直接的な機能を果たしていなかったわけだが、別の面でクラス通信が機能を果たしていたのではないかと筆者は感じている。

確かに、この実践で目指した「学習者どうしがお互いの話を聴くことの意義」について「クラス通信での教示 学習者の意識の変化」といった、直接的な機能の枠組は見られなかった。しかしその一方で、筆者が日々クラス通信を書いていく中で、このクラスで目指したいことをより明確に意識していった部分があった。つまり、クラス通信を書くことは「クラス通信による教示行動 クラス通信を書くことによる教師の目指す教室の意識化・明確化 教師の授業での教示 学習者の意識の変化」という段階を踏んで、自分の目指す教師を明確化するための土台になったのではないかと考えている。

とりわけ、自身の経験からもそうなのだが、経験の浅い教師は日々の仕事に追われてしまい、自分自身の教授活動、自分が目指していることについて意識的でありにくい。だとすれば、このクラス通信を経験の浅い教師が行なうことで、自分の目指す教室像をより明確に意識できる可能性があるのではないか。さらには、たとえ教師が口頭で伝えたとしても、声を通しての情報は、その場で消えてしまうものである。しかし、クラス通信という

文字によって教師の伝えたいことを伝えることで、教師が教示したことの“バックアップ”の役割を担っているとも考えられるだろう。

もちろん、以上のような点について、本当にそうした機能を持っていたかについては、まだ実証的に証明されたわけではない。したがって、今後もさらに研究していく余地があると思われる。

#### 4.2 クラス通信自体が学習者に及ぼしたプラスの効果

ところで、クラス通信が直接的に学習者に及ぼした効果について、どのようなものが考えられるであろうか。

本実践とは異なるクラスにおいて、2006年6月に自由記述のアンケートを行ったことがあったが、そこには、以下のようなことが書かれていた。

- 「他の学生が考えていることわかる」
- 「教師が自分のコメントに応答してくれる」
- 「教師がいつも気にかけてくれていると思うと安心する」
- 「何か言いたいことがあったら教師に“直訴”がいつでもできる」
- 「日々“書く”ことの単純な練習になる」

これらは全て、学習者にとって望ましいことであると私は考えている。例えば、についてはまさに、学習者と教師の間をつなぐものとしてクラス通信が機能していることを予感させるものであろう。そして、や は、学習者と教師の間の信頼関係を築くことに寄与しているであることを感じさせるものである。

であるが、毎回学習者にはクラス通信に載せるコメントを書いてもらっている。こうしたことを毎回続けることは、一見すると学習者にとって負担にも見えるかもしれない。しかし幸いなことに、今まで書くのを露骨にいやがるような学生はいなかったと思う。もちろん、面倒くさく感じて書くのを時々やりすごそうとする学生もいるが、書くといっても長くて5分程度であるし、書くことが「習慣化」されれば、意外と学生たちは素直に書いてくれる。中には授業終了のチャイムが鳴っても、ねばって書きつづける学生もいる。こうしたことが、学習者への「書く」ということのハードルを下げている可能性は十分に考えられる。

#### 4.3 クラス通信自体が教師に及ぼしたプラスの効果

その他に、教師に及ぼされるプラスの効果として考えてみたい。あくまで個人の実感の域を出ないものであるが、大きく三つほどあると考えている。

一番大きなところとしては「自分の目指す授業を明確化できる」という点が大きいと考える。前述の4.1でも述べたが、クラス通信での何らかの教示が、教師の目指す教室の意識化する。その意識が、次に教師の授業での教示へとシフトし、ついには学習者の意識を変化させると考えている。

二つ目としては、「学習者のことを考えながらクラスと接している」という意識を教師が常に持つことができるということであろうか。そのことで、学習者からの意見をより取り

入れやすくなるので、学生からの信頼感を得やすくなるのではないだろうか。

その他には「さまざまな質問に答える『回答力』を身につけられる」ということである。クラス通信を発行するにあたって書いてもらうコメントは、一つひとつが、かけがえのないケースであり、そうしたさまざまなケースへの回答を蓄積させることが、教師の力量を上げる手段として機能すると考えている。

#### 4.4 クラス通信がもたらす新たな可能性 ジャーナルとの比較から

次に、ジャーナルとの比較から、教室における参加者の相互作用について、考えてみたい。

一般に語学教育におけるジャーナルとは、交換ノートのようなもので、教師と学生がノートを使って交流することを指す。筆者の行っているクラス通信という活動は、ジャーナルと似ている点があると言えるであろう。ジャーナルの目的としては、

「第一の目的が外国語の習得ではない。基本的に添削はしない」

「心を開き合って、様々な話を続ける中で、お互いに成長していくこと、お互いの相互理解を第一の目的とする」

「そのような学習者と教師の交流の中で、外国語は自然に上達していく」

などがあると思われる。以下に、クラス通信との相違点を述べる。

まず、          についてだが、これはこれまでのクラス通信と目的を同じにしていると考えられる。実際に学生からのコメントについては、基本的に添削などはしないことにしている。せっかくコメントを書いても、直してばかりだと、せっかく自由なことを書いている学習者の心理を阻害してしまう懸念があるからである。ただし、以前筆者は副担任の初級クラスでクラス通信を実施したことがあるのだが、その際には、修正前の文と修正後の文の両方を掲載したことはあった。読んでいる人間が全く理解できないと思われるものもあったからである。

ちなみに、上記のクラスは2006年1～3月に副担任として担当した「ゼロ初級クラス」であった。初めはひらがなも書けない学生もあり、大変であったが、徐々に学生たちも書くことや読むことに慣れてきて、3ヶ月後にはそれなりのコメントを書いてくれるようになった。工夫次第で、初級クラスでも実施することも可能であると考えている。

次に、          についても、クラス通信を2005年4月からの発行形態にしてからは、同じ目的となっていると考えている。発行するクラス通信には基本的に全員のコメントを載せており、たとえ短くても一人ひとりにコメントを書くようにしている。毎回一人ひとりにコメントを書くのは確かに大変ではあるが、その方が学生としてもコメントを書くモチベーションも高まると考えている。

しかし、          については、クラス通信ではそれほど求めていない。これがまず、ジャーナルと異なる点と言えよう。この活動を日本語の上達とつなげることについて、筆者はあまり考えていない。もちろん、こうした活動を通しての日本語の熟達を否定しているわけではない。使い方によっては、授業の一部に組み込んで、学習者との教室活動に組み込んでもおもしろいかも知れない。例えば、筆者のこの活動を知ったある教師から「学生みんな

でプロジェクトワークのように作るというのはいかが？」と言われたこともある。そのような活動としてやってみてもおもしろいかもかもしれないし、今後、そのような学び合いのツールとなる可能性も秘めていると思う。

このように、筆者が発行しているクラス通信とジャーナルは、の点で大きく異なるが、もう一点、クラス通信にはジャーナルには良さがあると筆者は考えている。

それは、先の4.2でも述べたが、「他の学生が考えていることわかる」すなわち「学習者が他の人のコメントや意見にアクセスすることが可能である」という点である。クラス通信に載せる学生からのコメントを書いてもらう際、用紙に名前を書くかどうかについては任意ということにしているが、掲載される際は、基本的に匿名である（ただし匿名であっても内容によって学生が特定されてしまい、それによって学生が不利益をこうむると考えた時には、掲載を見合わせることもある）。匿名とはいえ、自分の発言が表に出ることを恥ずかしがる学生もいるかもしれない。しかし、こうした活動を続けることによって、学習者同士の共感を形成することができるというメリットは大きいと筆者は考えている。

もちろん、コメント用紙上に「これは載せないでほしい」という要望があった場合や「ある学生への個人攻撃」を含んでいる場合に、コメントの掲載を見合わせたことは過去に何度かあった。そしてそのような際には、書いた本人（場合によっては周囲）への個人的なフォローも忘れないようにしている。

また、クラス通信によって自分の書いたことが開示されることが前提であるのに、学習者はコメントで「本音」を出せるのだろうかという反論もあるであろう。確かに、本音は出し切れない面もあるかもしれない。しかし、普段は物静かな学習者が、普通の学習者よりも多くのコメントを寄せてくれるという光景に何度も出会ったことがある。

## 5. まとめと今後の課題

このようなクラス通信という活動ではあるが、今まで続けてきて、筆者自身はとても得るものが大きいと考えている。毎回の発行を続けることは確かに大変ではあるが、続けているうちに、楽しんで作ることができるようになった。実際のところ、発行当初は一つ発行するのに数時間もかかっていたが、今では一時間弱で書き上げることができる。続けられるかどうかの鍵は、クラス通信という活動を楽しめるかどうか、そして、トライ&エラーをしながらやっていけるかどうか、なのかもしれない。

時々、「何をよりどころにしてクラス通信を続けている（続けることができる）のか？」ということを質問される。「よりどころ」として一番大きいのは、「教師が変われば、学習者も変わる！」という思いではないかと思う。人は他人を変えることはできない、変えることができるのは自分自身だけであるとすれば、クラス通信は教師を変えることのできるパワフルなツールであると考えられる。

しかし、このクラス通信という実践は、教師のパーソナリティによる面は大きい。したがって、誰でもすぐに効果の出るような性質のものではないと思う。また、これまでに筆者が述べてきたような効果については、そのほとんどが実証的に明らかにされたものではない。今後はクラス通信の質的な部分などにも焦点を当て、クラス通信の効果について、より詳細な点を明らかにしていきたい。

さらに、時間と手間をかけて発行しているクラス通信ではあるが、現状としては、授業

と直接リンクするような形での活動ではない。もちろん最近も、学生全員にきちんと知らせておきたいこと、話しておきたいことなどについて、いっしょにクラス通信の文章を話題にすることがある。あるいは、前述の初級のクラスで実施した際には、文法の説明をするために少しだけ使ったことはある。今後は授業との有機的なリンクについても考えていきたい。

現在、筆者が一つだけ言えることは、今の筆者にとって、このクラス通信がベターな方法であり、フィットしている、ということである。もちろん、この方法に固執するつもりは毛頭なく、クラス通信の他にもすばらしい活動があれば（見つければ）、潔くクラス通信をやめることも考えている。

ともあれ、ここまで述べてきた個人の実感をあいまいなもので終わらせないためにも、その効果については、今後も検証を続けていきたい。

### 謝辞

本研究は平成 17 年度国立国語研究所上級研修の修了レポートをもとにしたものです。ご指導頂いた国立国語研究所の研修担当のみなさま、ならびに、研修中にさまざまなコメントを頂いた研修同期生に、心から感謝致します。

#### <参考文献>

- 市川伸一（2001）『学ぶ意欲の心理学』 PHP新書  
藤田哲也（2001）「大学の心理学講義における授業改善の試み - 学生による授業評価を用いた検証 - 」『京都光華女子大学研究紀要』第 39 号、143-168  
藤田哲也・溝上慎一（2001）「授業通信による学生との相互行為Ⅰ - 学生はいかに「藤のたより」を受け止めているか - 」『京都大学高等教育研究』第 7 号、71-87  
Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum

#### <添付資料>

< M 6 クラス通信 2006 年 12 月 20 日号 >

たけだ けいじ  
文：武田 恵司

NO. 20 <sup>あか たの みらい</sup>「明るく楽しい未来へ」

授業はあと3日！！



みんな頑張りましょう。

みんなへのエール(yell) どうもありがとうございます！  
みなさんのすごいところは、お互いを応援し合えるところだと、いつも思っています。  
みなさんは、本当に素晴らしい！ そんなみなさんに出会えたことに、感謝！  
授業は、今日一日だけになりましたね。  
最後まで、みなさんと楽しい授業ができますように。

さいごにやった自分の未来について書いたのがおもしろかったんです。

今日、書いたとおりになるようにもっと頑張ります。

ありがとうございました。

そう言ってくれるとうれしいです。こちらこそ、どうもありがとうございました。  
未来のことを、よりはっきりと「見る」ことは、心をポジティブ(positive)な気持ちにしてくれますよね。

過去のこともちろん大切です。ですが、私たちに今必要なのは、明るく楽しい未来について、じっくりと考えることなのかな、と思って、あのようなことをやってみました。

今日はねむくなかったから本当によかったと思います。

やった！

やりましたね！ おめでとう！（^^）  
私も、月曜日のみなさんは、本当によく集中しているなあ、と感じました。  
みなさんの集中力は、本当に素晴らしいと思います。

今日もありがとうございます。

ほかの日よりべんきょうたくさんしたんです。^^；

残った日はいっしょけんめいに。。。

みなさんに多くの学びがあったのなら、それはわたしにとっても、とてもうれしいです。  
どうもありがとうございます。  
今日と明日も、これからもずっと、楽しい学びにあふれた日々でありますように...

今日もおつかれさまです。

今日はいろいろなこと聞いてみてすみませんでした。^^

でも、本当に分からなかったのを知ってるようになったから

うれしかったです。^^

では、これからもよろしくおねがいします。

こちらこそ、みなさんのわからないことを解決することができて、うれしいです。

どうもありがとうございます。

「わからないことがわかるようになること」

これは人間にとって最高の喜びなのではないかな、なんて思ったりもします。

**ありがとうございます！！**

**がんしょのことでいろいろありがとうございます！！**

**残りいっしゅうかん頑張ります！**

どうもありがとうございます。

進学のこと、きちんとみなさんのお役に立てているのか、少し心配です。

もし、武田で不足していることがありましたら、遠慮なく言ってくださいね。

**TO . 先生。**

**今日もどうもありがとうございます。**

**そろそろ私も進学について相談したいと思いますけど。。。。**

**学校の情報がまだで。。。。**

はい、わかりました。お待ちしておりますよ！

クラスとしては、あと二日しかありませんが、遠慮せずに何でも聞いてくださいね。

他のみなさんも、ぜひ。

(後略)